

戒律と現代思想

——特に宗祖大師（伝教）に顕はれたる戒律思想——

木村哲朗

序論

仏教の聖典は、聖律論の三部門に分れているが、その中、聖と律とは仏自らの説いた所と称せられており、論は一般に仏弟子が仏説を祖述解釈したものといはれている。而して又、聖は法とも云はれ、仏教々義即ち教法を説いたものであり、律は又戒とも名付けられるものであつて、所謂僧団生活を為さんとする者に対して、それにあるべき行為を取締る規則であり、論は聖典に説かれてゐる真理をよく観察し、究明する智慧を指して云うのである。而して以上の三を普通三藏と呼ぶのであるが、此の三藏は定戒慧の三学に配当する事が出来、従つて能詮の方面より云へば、三藏の他に仏教はなく、又所詮の方面より云へば、三学の外に仏教はないのであつて、此の故に凝然大徳の八宗綱要には、「此云三藏如次詮於定戒慧学三藏是能詮教三学即所詮義以攝法義無有遺餘……（冠導本上ノ二十以下）」と述べている。次に、その三学とは、即ち定戒慧の三で、この聖果を得る爲に修得すべき学要に三種あるを云うのである。今これについて、四分律才五十八卷には、「復有三学増戒学、増心学増慧学、学此三学得須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢果是故當勤精進学此三学」（正藏至二二卷九五頁）と述べているが、此の中、増戒学とは、又戒学とも云い心身を制御する防非正慧の法義を顕はし、次に増心学とは、

又定學とも云い、よく衆生の散亂心を制して寂靜安寧をならしめ見性悟道せしむる法義を表はし、オ三に增慧學とは、又慧學とも名付けるのであつて、此れよく煩惱を断滅して本性を顕現せしむる法義を表はしているのである。蓋し、三學は實に仏道の至要であつて一切の法門は悉く盡せられないものはないのである。即ち定は戒によつて生じ、慧は定によつて発するのであつて、此の三學は必ず相互に扶け合つて其の何れも欠く事は出来ない。長阿含聖オ十五卷に、「有^レ慧則有^レ戒、則有^レ慧戒能^ク淨^ク慧、慧能^ク淨^ク戒、婆羅門戒慧具^{スル}者、我説^テ名^ニ比丘^ト」(正藏オ一巻九六頁)と説いて、仏敎の修行を戒と慧との二つに分ち、禪定の事は特に顯はれていないが、しかし、此れは禪定の修行が決して看過せられた訳ではなく、此の時の戒慧の中には必ず禪定が包括せられているのであり、この禪定によつてこそ仏敎的な智慧も始めて此れを得る事が出来るのである。

かくの如く三學は、仏道修行者にとつて共に重要なものである。更に雜阿含聖に至つては、これを一步進めて、「以^テ破戒^ヲ故^ニ所依退滅心不^ニ棄住^一已失^ニ毘見樂、寂靜三昧如實智見^ヲ離^ヲ欲解脱^ヲ已永^ク不能^レ得^ニ無餘涅槃^ヲ」(正藏オ二卷、12頁)と明言されてゐる通り、如上の文章よりみれば、三學の中戒律が特に重要なものと見做されていた事が容易に知らるゝものであり、従つて、私は仏敎聖典における戒律の地位或は意義、精神などについて論究を進めたいと思う。

本

論

オ一章 戒律の意義

戒律が仏敎聖典中重要な地位を占めるものなる事はすでに述べたが、併し仏典中に於て聖

要視せらるる戒律の意義について少し論究を進めたい。今是れを原語の上から見れば、戒は *sila* で仏教道德の総称であり、律は *vinaya* で仏教々団に於ける団体的法規である。換言すれば、戒とは仏教を信ずることが生活に表現せらるゝ事であり、律は仏教を信ずる出家の守るべき仏教々団の生活規則であつて、嚴密なる意味に於て、戒と律とは異なる所以のものである。かつて仏教に禁制箇條なる戒文を中心とする律が何故出来たかと云えば、仏教に教団即ち僧伽のあつた爲であるが、併し仏教の戒律は今日の法律の如く非法者の出る前に予めその場合を仮定して、これに應ずる條に作つたのではなく實際上の訓戒が次第に集積して、遂に今日伝わる林な形式を爲すに至つたのである。即ち律は仏陀の胸中にある倫理体系の発露でもなければ法律思想の系統組織のあるものでもなく、たゞ教団中の出来がその行爲上に修業の妨害となる乱行を発見されたり、或は外向の誹謗嘲笑を買い教団の权威を傷つけるが如き行動のあつた時、之れについて咄杖に教誡し將來を誠めて教団の一般に告示し、以て此れを犯す者は滅罪上必要なる制誡を加へる事を教へられたにすぎないので、その本末の意味は、煩惱の発動を防ぎ、その断滅を得んとする生活規則なのである。

かくの如く戒律は、三学の一つとして仏教に於て最も重要な地位を占めているのであるが、併し戒律の最も重要な意義は、教団によつて必然的なものであつたと云う事で、仏教々団に何んらの戒律なく僧伽の生活に仏教の理想が表現せられなかつたならば、仏教は現実に生命を失つたものと云わなければならぬ。戒をもつて仏教の壽なりと云う所以は全くこゝに存するのである。

第二章 戒律の精神

以上戒律の意義に就て畧述した私は、以下その精神に就て知らねばならない。蓋し、根本仏教又は原始仏教に於ける律藏たる小乗教は、戒律の条文はそのまゝ嚴守せられ、又それに対する解釈は戒律中に示す解釈によるべき自由の解釈、精神的解釈は絶対に許さない態度をとつてゐるが、然し是れは戒律の表面的事実であつて、その根本精神に至つては決して形式的なる法律によるものではなく、道德的且つ又同時に修道的なものである。即ち戒律の目的とする所は、一は教団の各自が相互に相策勵し煩惱を断滅して解脱に向はん事を期するのであり、二つには世人の教団に対する信用を保持して教団の使命なる正法護持の大任を完うせんとするにあるのである。

かくの如く戒律は修道によつて比丘の精神的向上を目的とするが故に、その必然的結果として戒律に説く刑罰なるものは、その目的とする所、何等報復的威嚇的な意義を有せず、全く教化教育にあるので、従つて全ての犯罪者に対して一林に且つ根本的に要求せられるものは、その行為が解脱の実現に違背する事を認め、之れを愧じて再び罪を犯さずとの確信を持つ懺悔である。更に戒律の最も重要な点は、精神的な方面に存するのであつて、必ずしも物質上の事ではないのである。要するに戒律なるものは、少欲知足にして勇猛精進なる生活態度を主張するものであり、必ずしも条文の末節のみ拘泥するものであつてはならないので、簡畧に云へば、戒律の精神は、惡事を離れ善事を修し自己を淨めて解脱に向わんとするもので、即ち次の一偈に帰する事が出来る。

「諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸仏敎。」（北本涅槃經、聖行品による）

由來この偈に於て七仏通誡の偈として、一切諸仏の教の基調となす事は、最も倫理的なる仏教である教法の要を説いたものと云うのである。

第三章 宗祖の四戒思想について

如上、述べて来た様に、その形式上より云う時には、戒律は小乗仏教に於て最も重んぜられ且完備したるが故に仏教の戒律と云へば小乗仏教のそれが代表的なものと云うべきである。しかし乍ら戒律思想全体から云う時には、小乗の戒律思想に対して大乘の戒律思想のある事は當然の事であつて、而してこの戒律に対する態度から大乘の精神は一層明瞭となつて来たのである。既に述べたように、仏陀の制戒は、時処縁に應じて制定せられたのである。然るに仏滅後の教団は次々にその教を増し、時間的にも又、地理的にも仏陀制戒當時の事情と異なる生活になさなければならぬ様になつて来たのである。かゝる状態に於て、尚形式主義を固執する時には、戒律は徒らに比丘の行為を拘束し、遂には仏教本来の真精神なる慈悲救済の活動をも阻害するに至るので、かくの如き小乗仏教の形式主義に反対して興起したものが即ち大乘仏教の精神主義であり、而してこの思想によつて大乘戒も成立するに至つたのである。

然し乍ら此の大乘戒思想は、決して小乗戒より卒然として起つたものではなく、その間、徐々に進展の段階をとり来つた事は勿論である。今、大乘戒思想の発達課程を略述すれば、普通、華严、十地品をもつて後世の所謂三聚淨戒の起源とされているが、次に涅槃經に至つて、戒に声聞戒、菩薩戒の二戒を説き、こゝに明かに小乗戒に対して大乘戒即ち菩薩戒の名を別立するに至つたのであるが、更に梵網經に於ては、小乗戒に対立して特有なる戒条を組織し、小乗戒

と全く別立するに至つたのである。かくの如く大乘戒思想は華嚴經に始り、涅槃經に至り、更に梵網經に至つて完全に小乗戒と別立するに至つたが、然し乍ら支那、印度に於ては、思想としては小乗戒を排斥したのであるが、その實際に於ては未だ小乗戒を脱却せず大乘教徒の日常生活の規定はやはり小乗戒に求めたのであつて、世人も亦此れを以つて眞の比丘なりとしたのである。更に梵網經に云うが如き單なる菩薩戒は、實際に於ては行はれていなかつたのである。然るに日本に於て、宗祖大師は、「大乘の徒には大乘の戒なかるべからず、大乘教徒は一向に大乘精神により生活すべし」として、小乗戒とは全然没交渉なる梵網の菩薩戒を高調宣揚し、南都戒壇に對して比叡山に眞の大乘戒壇を別立せんとしたのであるが、しかし南都戒壇などの反對により宗祖御在世中には、その御本願を達し給う事能はなかつた。然るに、その遷化の報一變天聽に達するや追慕信念に止み、遂に三式を聽許して初七の斎忌に供へられ、又大乘戒壇建立の勅許をも下さるゝに至つたので、かくして、日本に於いて、如めて純然たる大乘戒が獨立するに至つたのである。今、これを思想史的にみても宗相の円頓戒思想こそ日本仏教の母胎をなすもので、円頓戒は即ち日本仏教なりとも云い得られるのである。

かくの如く宗祖は、円頓戒をもつて日本仏教の指導精神としたのであるが、然るに宗祖は何なる意圖の下に円頓戒を創立せんとしたのであるか。これについて宗祖の守護口界章に、「當今、人代皆轉變^シ都^テ無^ニ小乘之代^ニ正像稍過^キ己^キ末法太有^リ近法華一乘之代^ニ今正^ル其時^{ナリ}」(伝全才ニ卷三四五)と即ち宗祖は日本國土が純大乘國であり、而して國民の全てが大乘の代類であること、所謂圓代淳熟の純大乘國であり、純菩薩土なりと觀察したのであつて、かくる純大乘國なる日本に於ては、從來行われたるが如き小乗戒にては、眞に國民を教化する事能はないのであ

つて、我國民を教化せんが爲には絶対に小乗律儀を混へざる一向純大乘戒に依らねばならないので、宗祖の四頃戒壇創立の本旨は實にこの處に存するものと思考するのである。前述の如く、宗祖の戒規は小乗戒より獨立した純大乘戒即ち梵綱戒にあるのであつて、かくして叡山の大乗戒壇により實際上大乘戒は小乗戒より獨立するに至つたのであるが、こゝに注意すべき事は宗祖の眞意は、決して小乗戒と對立的に獨立せる梵綱戒ではなく、所謂善惡對立の戒律思想の範疇を脱し、小乗戒も大乘戒も共に超脱するものである。即ち宗祖の四頃戒は法華の諸法實相性具三千、迷悟一如の哲學を戒律の上に徹底せしめたもので、こゝに宗祖の佛教史上に於ける最も重要な地位があるのである。故に四頃戒は所謂戒律ではないのであつて大師自ら四頃非戒と称せられたのはこの意味を示すものである。四頃戒は正依法華、傍依梵綱と云はれる如くその戒条は梵綱聖によるも法華をもつて基礎となし根本精神とするものである。故にその戒体は實相眞如なる仏性である。「戒体秘決の中には、「戒体者以中道實相爲戒体」及至眞如仏性^ハ既^ニ爲^ス戒体^ト一切諸法無^レ非^ニ仏性^ニ」(伝全一卷四五六―四八七頁)とあり従つて四頃戒とは一得永不失のものである。それは衆生本來具有するものであつて、即ち衆生は本來此の戒の他に生ずる事は出来ない。是れを所謂自性本具無作戒と云うのである。此の故に四頃戒の受戒の本義は小乗戒の標に一定の戒条を受けるものでなく己心の妙戒を受けること、即ち衆生即仏なることを開悟するにあるのである。之れを要するに宗祖の戒律思想は、その根本精神に於て大乘佛教の極地たる諸法實相生仏一如の境地に立ち、此の見地より梵綱聖の戒条を觀たもので、實相の上の戒相なるが故に對立的のものではなく、戒なくしてしかも戒を具するので善惡共に戒なのである。たゞし、この事は生仏一如、諸法實相の自覺の上に立つことを云うのであつて、

無知の人はこの爲に邪見に陷る恐れがある。更に宗祖は「戒体秘決」に、「無智人中、莫し説^レ此^ニ、
聖^ニ一謬^ヲ入^ニ邪見^ニ墮^ニ惡道^ニ可^レ懷^ム可^レ秘^ス可^レ秘^ス」(全集一卷四八三五)と説かれこのようない地に立
ちて仏教に於ける戒律思想を次の如く批判分類している。

自利の爲——小乘戒——自己が聖果を得るため

戒

共大乘戒——瑜伽戒——化他あるも畢竟自行に帰す

利他の爲

別大乘戒

地前——梵綱戒(是を持するものは順持化他のために惡をなすは迷持)
円人——同上(法華戒)——(戒相に対しては順逆に持あるも持心よりすれば共に実順)

即ち宗祖は南都の瑜伽戒に満足せずして梵綱戒に進入したのであるが、入唐して天台四教を
學ぶに及び、更に梵綱戒に満足せずして法華戒に進入したものと云われねばならぬ。かく法
華戒に進入して後の梵綱戒規は従来の梵綱戒規より全く一変したのであつて、梵綱戒に四教の
内容を与え、これを円戒に引上げられたのである。かくの如く宗祖は、大乘戒の精神を鼓吹
し本具の戒体に順じて我執法受を離れて積極的に活動することを主張したのであるが、此の不
断の慈悲攝化の活動とは、無我の下なる愛をもつて他を抱擁し、抽象的な自他を離れて主客冥
合の眞体的中道実相に含入する事である。

かくして円頂戒の思想は、宗祖に至つて始めて徹底に実現し得たもので、此の奥に於て宗祖
の円戒思想は、大乘仏教教会史上一新起源を現出したものであつて、后世新仏教の勃興はこの
宗祖の円戒思想に影響される所は決して少くないのである。

註記

論

以上簡單乍ら戒律の概要を述べると共に宗祖の戒律規を考察して来たのであるが、最後に、

繰返して戒律の意義を述べると、即ち戒は仏教を信ずる者の生活態度であり、律は仏教徒の団体規則である。換言すれば、戒は仏教道徳であり、律は仏教法律である。

小乗仏教の形式主義は、戒を忘れて外的形式なる律を重んずるに至り、仏教の真精神は枯渇するに至つたのである。かくして大乘仏教の精神主義が生じて律の中に戒を取りもどし、戒によつて律を規定せんとするに至つたのである。このように宗祖は形式的個条なる律を主とせず、仏教的信念の表現たる戒を主としたのである。而して、戒の根本は仏陀の教を心底から信ずる争であり、我に就て仏教を実現せんとする精神である。即ち菩薩の大戒を受ける事は三世を貫く利他の大行を実行する事であり、而して是れこそ大乘仏教の眞の生命であり、同時に又日本仏教の真髄でもある。

此のようにして、仏教者たる者は凡てこの大戒を具足しなければならぬのであつて、仏教は單なる知識たるに止まり生命とはなり得ないのである。併し生命の発動のない所に眞の仏教はないので、この意味より戒は仏教の根本であり、又そのすべてである。否仏教覺醒を以て終局の理想と爲すべき凡ての人類にとつての根本なるものと云うべきである。日本は東洋に於ける民主国であり、円杳淳熟せる菩薩の国土である。此の菩薩の国土の民心を指導して国民精神を統一せんが爲に法華空を骨子として梵網聖の説相による一向大乘の円頂菩薩戒の発揚宣布を最一としなければならぬのである。現代日本を顧みる時、政治に、外交に、又思想的に、あらゆる處に行詰りを生じている。即ちこの行詰りの根本如何と云へば、畢竟世道人心の頹喪に帰さなければならぬ。この故に国難打開の根本策は宗祖の所謂「広大にして真俗一貫する円頂大戒を信奉する事に在らねばならぬ」。

宗祖は、「惡爭^ヲ向^ヘ己^ニ妙事^ヲ与^ヘ他^ニ忘^レ己^ヲ利^ス他^ヲ慈悲の極^{ナリ}」(学生式全集一卷二頁)と述べている。四海同胞世界の平和は、かゝる大慈悲の道徳精神より生れるのである。宗祖の高唱した円頓菩薩戒は鎌倉時代以后に至り称名往生や唱題戒仏等の教が盛んに宣伝せられた影響を受けて、民間仏教からは殆んど忘れられてしまつた観があつたのである。然し乍ら人智の進歩に現代を淨化し救済するものは、此の眞俗一貫する一向大乗円頓の菩薩戒法門を除いては決して他にその類例はないものと思考するものである。

参考資料

- 一、八宗綱要 冥然大徳 一、守護口界章 伝教大師
- 一、四分律 才五十八卷 一、山家学生式 全集一卷
- 一、大正藏经、一卷、二卷、廿三卷、 一、雅阿含经
- 一、戒体秘决(全集一卷、二卷) 一、北本涅槃经(聖行品による)

弥勒信仰興起背景の佛教思想

児 玉 玄 太 郎

私は「弥勒信仰の起源」について研究を進めて行つたのでありますが、あまりにも広範囲にわたり過ぎましたため、こゝではその興起背景たる「佛教思想」について発表し諸兄の御指導を仰ぎたいと思つております。